

和田節
編定

開明
小説

春雨文庫

第三號

上

20

25

30

35

A 495
5

松村春輔 閱

和田定節 編輯

第三號

開明
小説

春雨文庫

東京書肆 文永堂

文庫

作者が自ら編みし和
詩を變體を總てを
の海に序文より代ふ

茲よむらひの文庫ありけり
別のそ地をそて逍遙とあり
無盡の場を中へ
姿新しき流行を寫す

48-7538
7

櫻將妬海棠

櫻將妬海棠

桃被惡山薑

冊中奇絶説得と妙あり

文よ花あり讀で佳境よ入る。

明證の卷談いよ見るが如し

章よ實あり時宜の用を識ぬ。

毫の林よ鳥も啼をぬ。

春雨三ノロ一

硯の海よ氷解とは。

書房の是を以て米櫃を繕らひ

人よこれをもて火鍵の徒然は

如是々々

春雨文庫

櫻將妬海棠

明治十年の春のあけの日

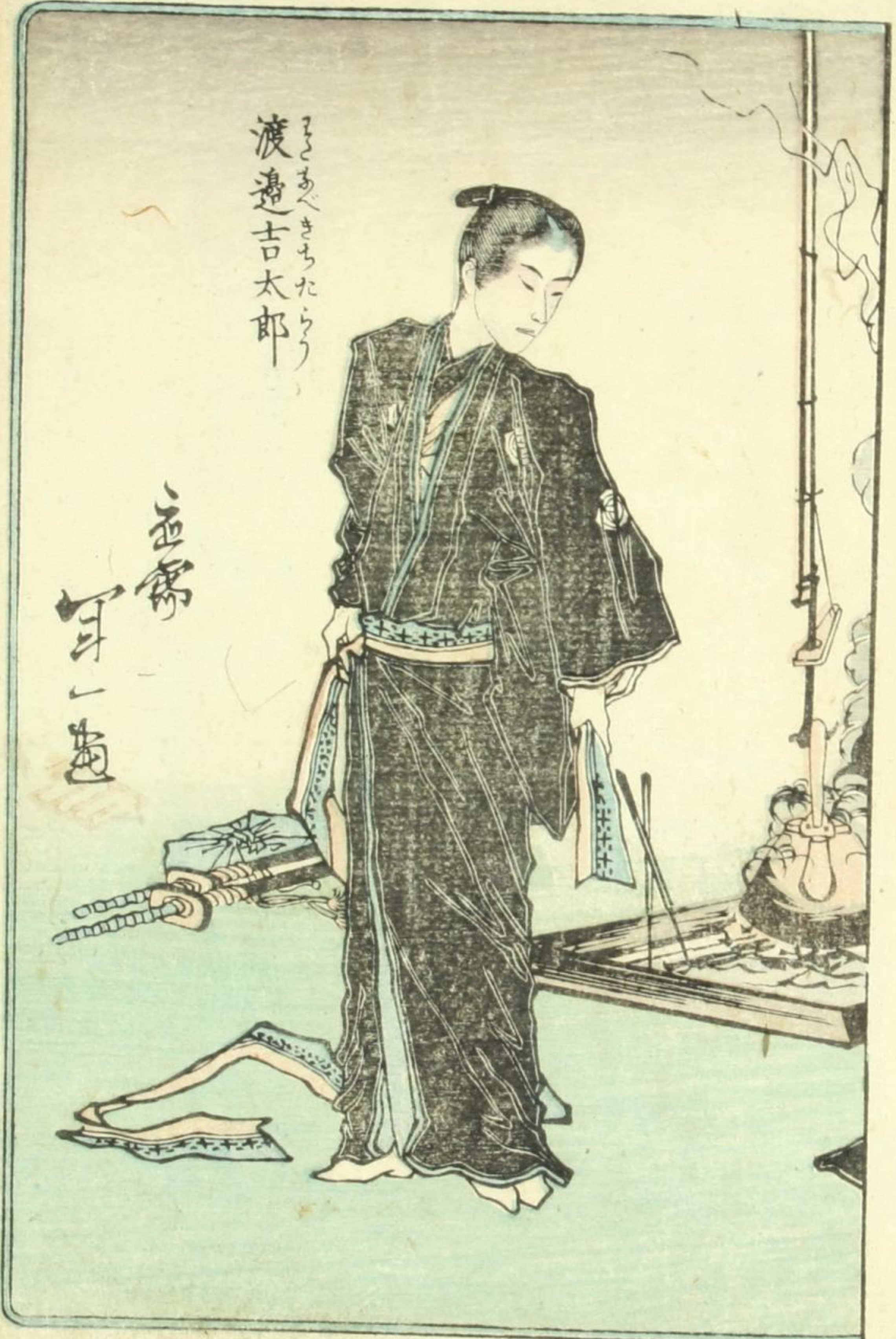
洋狂戲迹





渡邊吉太郎

五
一
遺



濡いろは
初手いろは
石申
若子
長孫
駕子重馬

中村於梅



春雨三ノ三

春雨文庫第三編卷之上

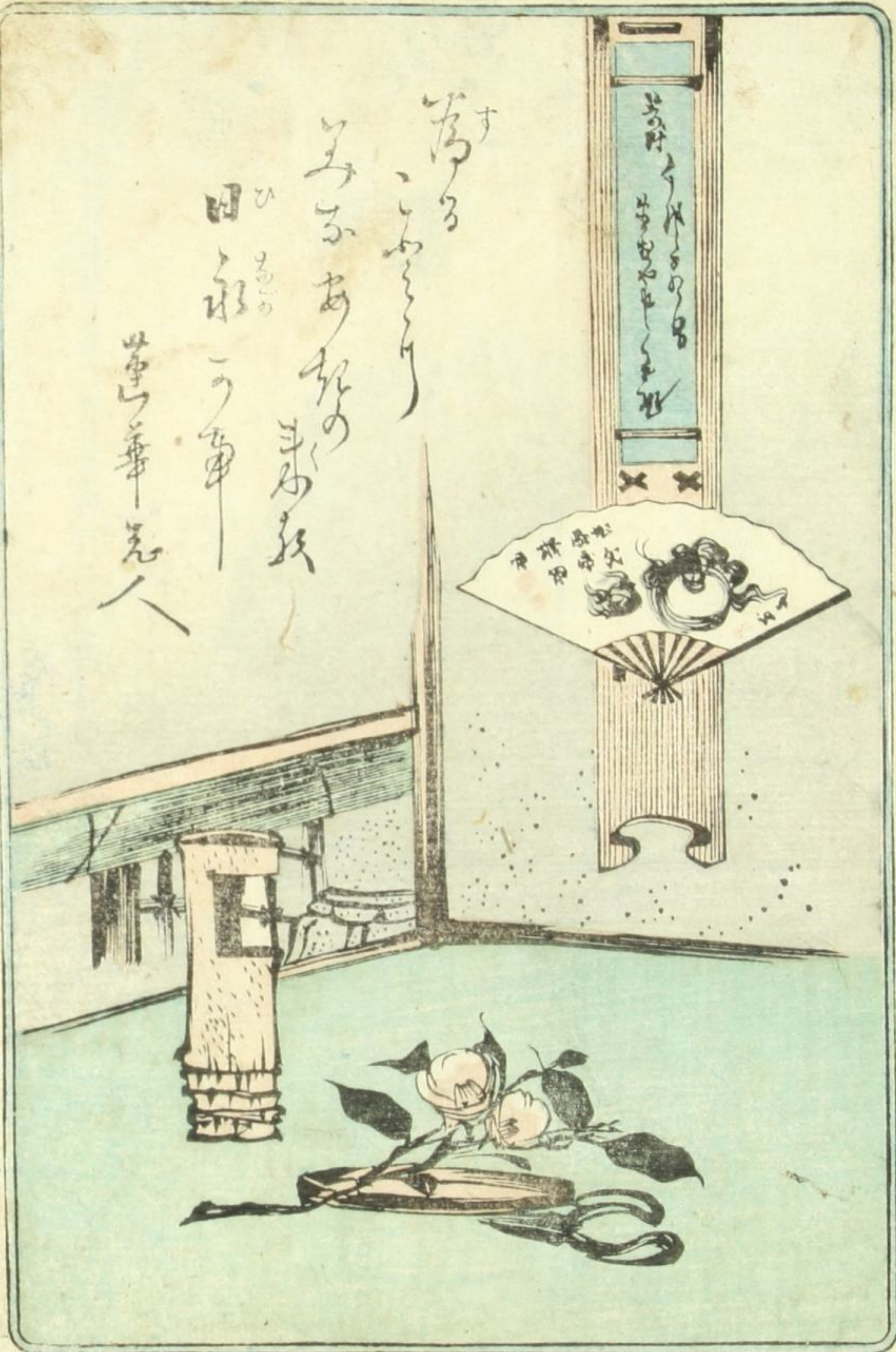
東京

松村春輔 閱

和田定節 著

第八回

三間間口ふ二ヶ所の土蔵見世ふの數多の書籍と積
 と伴頭若いしち丁稚まで六十七人ふて立働けと昨日
 今日と日ふ坊し諸家の藩士上京すれば歴史兵書の
 の注文立居世話しき敏繁昌ハ何時ふも覚えぬ程



高
 みるあけの
 田
 華
 人

あると主人の横田清兵衛の家業をよそよ仕入さ
る見じども主人の横田清兵衛の家業をよそよ仕入さ
へ伴頭まうせの出あるき丈と異なり女房のお岩の
二十と二ツ三ツと路の雪の色白く眉目かこちり美
しきのとならず夫は貞せつ姑は事へて孝行あると
内外の人の譽りのみする程ありき此日も清兵衛の
他出るし母のお政の去年お岩が産たりし清兵衛の
惣領徳太郎を傳の小女と供ふ離れ座しきの日光り
ふ遊をせて居りお岩の一人茶の間なる火鉢へ炭と

次ぎるがうら出入り屋しきの長州さまの桂さうなや
村田さうなが親しくお出の有るやうふるり何支ふよ
らず一際おげんで働このに此頃での家を外ふる
聞お祇園町の藝子小常とやらを先計町の藤村へ
揚淀め同様ふして置との噂人の口ふ戸を立られず
嘘の話しでいあるまのいけとども左様しと氣性の人
でいあるは是ふの何様やら奥ふうの仔細模様の有り
げる事夫は附ても老母さうながとく見世と流覽

みされ 仕成て清兵衛の何様して内々嫌ひ不成と今今日も
姿を見せとらぬ困つと奴のお腹どち所苦勞と云
させ申さぬが宜と思ひ時又とつての啞八百もさう
さうの言ひ悪い嗚呼何様とりのやト我お同ひ我
み答へつ胸塞がり持し火箸の力ぬけ傍へ下せ鐵
瓶の湯の冷るをもお忘れ思案ふあまる溜息お忙
然たりけるおの折から裏口より這入り来るの敷
屋町姉の小路の角に居る終屋寅吉と云ふ書画小道

春兩三十一

具と商ふとのふく主人清兵衛お取り入り常ふ親
く出入るも案内もこいず臺所と次のるの隔ての
障子を明て内を覗やり「オヤお一人といお淋しい所
例のふさぎの虫もさらくおを理ぢやアおせへやせ
んと言ひるがう後を建てきり火鉢の向ふへ居り
こめおお岩の莞尔笑顔をはぐろひ「何方うと思つ
たら寅さん今日のお得意まをりて長州さまへお往
みさるのぞおはいます子「まア其様るのぞおは

へやす吾儕るぞの出かけるのりぬ犬も歩行あはれを棒ぼうみ當あ
うと思おもひからどぞ此方こちらの且那じんなの内うちを外そとよりささる
ひゑん解けせやせん何故なぜもら美うつくしつて程ほどが宜よく
つて實じつがあつて小こ子うちらでどらうどろ頭あたまの上うへへ捧たげ
て置あても有あり難がたへと思おもふ一分ぶん一厘りんまうし様やうのゐい
お前まえさんと捨すてさうめい先計せんけい町の藤村ふじむらへむりり
這入まりこんで新あたらまね狐きつねの小常こつねふ化たれ常歌つねうただの
常つね雀づるどのと言いふ小せう便べんくせへ小娘こむすめと相人あひてふ無多あぶるお

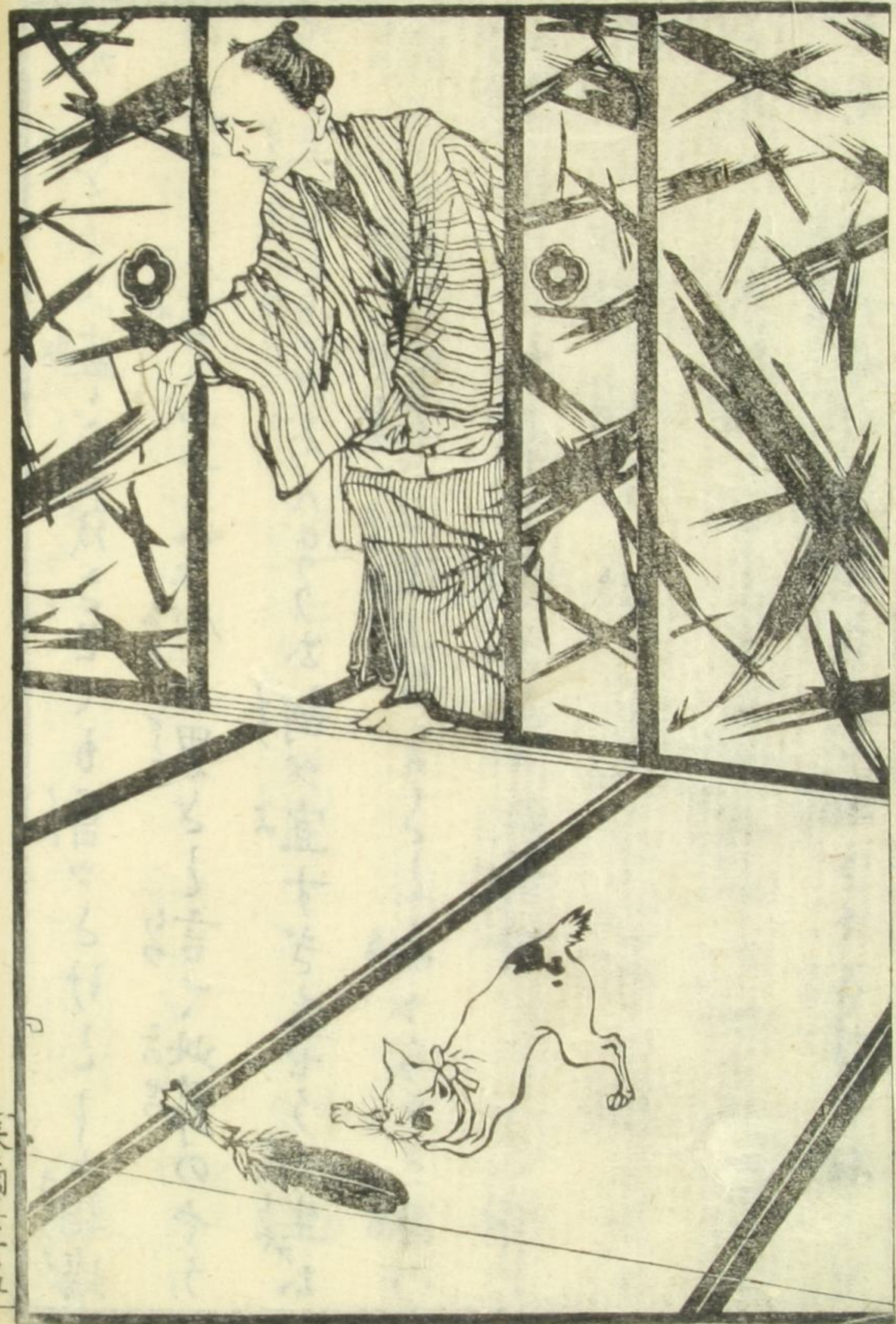
金かねを賣うや一鼻ひとの下したと長ながく一ひとお在いるさうとの勿体むつてい
糸いとへ訊きぢやア直ただ往むかへやせんう鰻うなぎと癩かさね止とみしの鰯いわしと美う
味あじがつく居ゐるとい何様どうしと理屈りくつ蓼れう食くふ虫むしも程ほど
がありやす男おとこと生うれと詮かみ小生こむすめらア一串ひとくしでも宜いう
ら鰻うなぎの蒲焼くわやきのやうな人ひとが給たまて見みると言いひるぐら
否味いやらしい目附めつきとしてお岩いの顔かほをおいつといんるお
岩いの開ひ知しらぬ振ふりみて煙草たばこを吞のまるぐら一ひと成なり布ふど
人ひとさんからの夫うちの夫とこが小常こつねよ溺なまつて藤村ふじむらへ呼よぶやうふ

うんえませうが彼の少一訳があつて吾侪が小常を揚
て貫ふのサ夫どろろ夫での實ふ迷惑がつて小言を
かり言て居るのどアねアあれど極りて亭主を
貯ふやつサ。エ。モシお岩さんお前さんが何程且那の
鼻の下の長く成とのと償ふとお思ひますつても今
日ハ芝居見明日ハ義太夫の寄吹きと人目も構は
ず聖天さまの烹とどろりと言ふの知りあひが彼様で
も有うろと思ふ様ふひつ附あひての道往ハ何ねる

見とと一ふ直ぶと成させても首ツとけと一う相場
の立やうハ有りやすめエ何を男どと言て此節のやう
でハ且那の方があんまりお割が宜すぎませう小生お
前さん程る宜入ハ江湖上ふまこととをうらうと思つ
て居るせへう兎角お前さんがお最愛一くつて成り
やせんト亦も否味る目つきをとしてお岩の顔とをう
と見るとき何時のるよやら下婢のお初が後方よ来
て居て大声あげ「松屋さんが極りて否味る振りと



清兵衛の留
 守と窺つて
 寅蔵お岩の
 許へ通ふ
 年一画



年一画

仕るをる口へるアと言れて怖り「ア」出し抜けよお初
どんト胸と撫るぐろ「魂消させちやア笑つて居てサ人の
悪い「オホ」吾儕が貴君をおどしでも仕やアあまひ
河自今の勝手で魂消ておいて其屍を此方らへ持
まんで仕者入ッちやア些迷こくで座いまするへ
「お岩さんお一人で誰も居祐んと思ひし油断の不意
をおれとので未は震へが止ら祐エ虫の毒どうら大
きる声とするのへ堪忍して貰ひてエ「此くらおる

こで魂消るなら三十石の船の食をんうよ鳴り立ら
れると即死をしてお仕まひるさいませう「雀亀」と
この言ふこの、即死を去ても宜から乗て見てへと
思ふ船も有るのサと横目でお岩の顔を見るトお初
が傍でまゝと大声「終屋さんの助兵エッ」の目付
と「何ぞと言ふとお内室さんのお顔を御覧なさ
るヨ」まゝと嘯鳴のう全てへお前「嫉妬やきごとくんえ
る「初」おんとうよ左様なので座いますヨ此うちお岩の

茶棚ちやだぬふある急須きよすを採とつて煎花あななと入れ煉羊羹ねりやうかんの菓か
子こざらと共ともに寅吉とらきちの前まへへ突き出だし一ツいっすいお湯ゆと少すく
冷さましこのでお茶ちやがおな大きおほき遅おそく成なりまし一何い様どうい
しはして是これは有あり難がたう小生こうちもお茶菓子ちやがしを貴嬢あまご
み献けんトといと思おもつて少すくくむりり持おさ参さん致りし一ト
傍かたへに置おきし風呂ふろしき包ふとを開ひらき一五十年いんごねんも前まへふい
江戸えどで京御菓子きやうかんしと名なを附つけるけれを賣うるれかつとさ
りどが當時とうじの京きやう都とで江戸えどおん菓子かしと言いふ銘めいお赤あか

長巻三上七

と買か入いるてがおな多おほいといの妙めうふおなるりのサ旅りつ最もとも江戸えどでも
新製しんせいしいで随分菓子ずおんかしふお骨ほねを折をりやすまの玉たまだ
れお牛皮ぎやうひへ山葵さんさいを包つとこんどとおの近ちかむり江戸えどで
の新しん發明めい栄太樓えいたろうどの藤村ふぢむらどので製せいしたおのが多おほく
此方こつちへおまおつつとお来きやすま一ツ上ひとあがつてはお覧らんるおせへト袋あぐら
へ入いれと杉折すぎをりとお岩いわの前まへへさし出だせお初はつの傍そばか
ら口くちと出だし山葵さんさいどおろおのおと社あつしやう修しゆて蜥蜴いりりの黒くろ焼やき
と牛皮ぎやうひへ包つんどお菓子かしでおはおなおいおまおせんおりお内うち

へ 室さん空然食ると往ゆません寅 其様そのを振ふるること
言いふ 蜥蜴いもりの黒くろやきぐまへ 宜よろと思おもふ人が落おちるな
ら 意こゝろの病やまひで疲やせるふやア及およぶ 祐すけへサ初一ひと夫おとこで由よし貴あ
君きみ縁えんまきり 榎えのきと摺すり小木こぎよこし へお味あじ嚼かむと摺すりて否いな
ふ成なりと男おとこよ食たさせると直ただよ遠とほざうると言いふぢ
やアごたいません寅 其様そのを苦く勞らうよするあり
早はやく往ゆて竈かまどの下したと焚たきつけ祐すけへのり。アレ彼鐘あのかねの九このッ
どぜと指ゆびと折をると死し座ざしきの方かたで時計とけいの音おとギリと

春雨正八

チヤンチヤン

終屋ひいらぎやう寅吉うらきちの此家このやの女房めいぶどうお岩いわの顔うらかうつくとち美うつくしこと
諸事しよじ小程せうぢよくしを真實まじつなるふ深ふかく惚おれと清せい
兵衛べゑと交まじりのと厚あつくし清兵衛せいべゑと唆そるのし小常こつねと
媒ま妁ごお岩いわと清兵衛せいべゑの中なかと悪わるくさせんと謀まりしのふ
清兵衛せいべゑの寅吉うらきちのめくさんの如ごとく小常こつねの為ために湯ゆけ
て家うち小片時せうこけい尻しりのすいらぬと附つ込こそ日ひごとのみ横よこ
田のへ来きり頻ありのふお岩いわと清兵衛せいべゑの中なかへ水みづと差さし

お岩の心を動り〜豫ての望を遂んとすれ
どもお岩の貞烈み〜言ひよる便あ〜るうち
此方ハ早くこれと察〜下婢のお初みあ〜かド
め言ひはけ置ゆゑお初〜面白半ぶん〜借と
そあ〜る議論ハあるなれ此於屋寅吉より〜
後年又至り清兵衛の忠勇〜ちまち多年の機
會と過りお岩の貞烈ます〜加〜著る〜この
件々の下回よあひ〜解分ると〜て知りぬ〜

第九回

横田清兵衛の藝子小常の色香ふ引れて先計町の藤
村のそこ在りたりしが今朝も家又帰り宿酊の心
地おも氣ふ火鉢へより何やら思案の顔つきと女
房のお岩の覗きこそ〜何ごうお色う悪うございませ
すッな風邪ごとと往ません〜うらふ薬をカロー上りまし
それとも被鶏卵酒ハ否でございませ〜ト案ト顔
ある優〜さふ清兵衛ハ天窓と搔きまがら〜何の

案トて呉んるさるる風邪ぢやア病人口から求め
病ひサタア終屋め無理やり強つけられ大酩酊
なりとぎて些天窓が重いのだが今直快くる
るト氣の毒さうみ言をばき一夫ぢやア一口上つと
昨日のお酒と呼び出してまほひ其あとで酒膳より
鶏卵を落しと薄い雑炊み致しませうう清
せ女房任せの男ど宜やうみして呉んるアア
仰ついるア憎らしい女任せや在るさうくせふと言ひ

るぐら涼爐へ炭とつき下婢ふ言ひつけ小鍋と取
りよせてお岩の忙々をくらき居る清玄清の黙然
と火鉢ふ凭れて思案のていおのお茶屋で美味い
ものも出来ぬくせよお客を待せるのが上手どか
ら流行あいので使はいますの美味りの何様どら
知らぬが内室の世辞と氣取りの宜のの外はと
ひの評判どせお岩お夫ぢや其積りで此客様ふマア澤
山池をさうとつとませうへお出来まると言と

ころろが身上ありぎりでお膳の上どけのりの餘り深
静で酒を飲ひし移へ何と胡瓜の糠味噌を
いつア有難へ魚なんぞい実ふ食あきて居るくろん
るのも酒免どが此節のまど料理屋でも刺身の相
手ぐらぬえやつとどのよ爰の家ぢやアまう香物ふ
遣ふ是どりう氣取りが宜と言て答はれるのどア
拵の代り後の鶏卵の雑炊をりり否な茶屋で酒を
い升移へ何ふ若ろアは馳走よりやせうトお岩酒

と取らせ近ひ酒の熱燗と苦い顔して飲むぐら一實
ふ無理酒の身体ふ當るよ家で彼様して飲のみかぎ
る一実正ふ餘りたんといお毒ふ成ううと思ひ升酒
ととんと飲む人の往昔から長生と志移へと正札の
附て有るを意地の穢ねへのさるアと内と外なる行
状を顔ふも出さず忠やうる其仕こる一女房ながら
氣の毒ふ思ふもる自然なる愛相も親しき中の禮義
るるべし折うら小僧が障子とあけ遠しき声をして

且那さん大變がふつ始りまゝと下げて清兵衛「ナニ
 大變が始りまゝと子僧大とん變が始りまゝとと申し
 て表と人々駈歩行ますりし何の事りと存し例の
 往過の隊長とあゝい早速火元見と出かけ承りり
 まゝとら伏見奉行の林肥後守さまから所司代さ
 まの酒井若狭守さまへ左様いつと参つとふい播州姫
 路へ浪人とのが集り島津和泉との八人と大將めて
 京都へ押して来るり油断大敵御用心とくとの



ふ岩

丁稚

清兵衛

で酒井さまは怖り仰天さう言ふ訳ぢやアいつ何時
薩广芋が浪人者と引きつれて京都へ押し込んぐ
来るかも知れぬとして関東から上つて居る武士と残
らず呼び集め甲や冑よ身と固め弓鏃砲と以て二
条のお城で軍と為るのどこのと若おつ始まつたら
何様おませうと私の胸がまづ先へ陣鐘陣太鼓でど
んちやん致しまする訳ではないます一清をりや何ゆ
ても騒ぐ一い話し成程島津和泉侯が姫路へお着

ふるると直ふ平野次郎が首領となり多勢の浪士を
引き連れて御旅館へおしこま攘夷鎖港の歎願書と
出し頻り又疾ふ迫つこので疾も餘義多く浪士ら我
伏見まで率ひて上らるると言ふこととつておまぢやア
大方おの事どらうハテなアと腕を組と監を居らり
しが三條さまの河村能登守さま長州さまの山田
虎之助さま西郷吉之助さまのい何様なされとら
思はずも言ふと子僧が吹かちり一柱さまの先刺

表おもてとお通りとほりでこにざたいいましとと言りれてハッと清兵へ衛ふの
口くちと押へぬむりるるり此時ときまも見み世よの子僧ぞうが可
エ平野のさなかららお手て紙が参まりましとト差し出せを
清せい兵へい衛ゑいの胸安やすかぬ折をりる故ゆ出です手も遅しと清せい取と
りて「使つかひの者ものハ何様どうしと「エ差置さどと申ましと直ただ
み帰りましと「左ひだり様さまうよしと「言いひまぐる手て紙がの封
と切り「是ハ大ぶ長文ぶん句ごどアと其處そこで小生せいこと
西さい郷ごう吉きち之の助すけおよび清水すい寺じの成就じゅう院いん月げつ照しょうらと共とも小こ幕まくら

威おどろを避け西國こく小こ至いたるといへども諸しよ侯こう君みくハ徳とく川がわ氏し小
壓おさせられ夫が崇りと恐おそれ我輩わがと捕縛とらむさんと為す
るよ因より躬を寄すべきの方かたなければ月げつ照しょう子しハ薄命はくめい
と歎ト終ハ西海かいの波ハ投ト底の藻屑そうせつとるりたる
なり
月げつ照しょうハ西京きやう清せい水すい寺じ法ほふ性じやう院いんの住僧じゆそうるるり「前
号ごうより既ハ折々さ言いひたり此人この身みハ世外げがい小こ居おると
りども攘夷じやういの心深こころくし「勤きん王おう無む二にの志あるりと

因り近衛公の愛顧ふらく竊に廟議の機密小関一
西郷隆盛平野次郎らと事と謀り徳川政府を
廢さんとせしふ此ごろ政府の威力や哀ふると
りども猶強きところ有りて勤王の黨を捕ん
とすること嚴あり然れども西々らへ薩藩の
威名小遠慮し幕吏もとやすくへ手と下さず獨
月照と縛さんとして探索せしむると嚴重なれ
近衛公月照と南都へ落さんと謀る月照西

長南三十五

郷のりへ往き此事をつら西々らへ海江田と共月
照と轎に乗せ夜半ひそらふ南都へ送らんとせし
幕府の捕手いつう是と知り轎の中を窺ひ附
来る海江田斬てまてんと言ふ西々押し止め轎の
前後ふ立ふさがり守護なり大坂の薩州郎より
連往き潛匿し置き世間の模様を探るは南都を
猶危ふきを以て中國へ落さんと大坂より乗船
させくりしは此時もまゝと捕手の為り追れ

たれしうりしが出帆の後るれを僅み虎口と遁れと
り期て月照の長門の赤間を突まりしり此処に
在る白石一郎の同志の勤王家なる故尋ね往き
しよ白石遂一は薩藩の鹿兒島にある北條右
門に依託んと自身月照を伴ひ薩戸の米津へ至
り上陸して鹿兒島の城下に入りんとあるは
関門嚴しく他郷の者の入るを免さざるとを再度
野間の関より船に乗る阿久根へ廻りし此処

の関門の見張りすところ緩りなりし故漸くありて
鹿兒島の城下み入ることを得たり然るは藩吏
の内は幕府へ心を通ひす者あれを此地とりども
猶探索さびきまを以て志せ一方へ足と止めず
同宗の寺院を知る者の住僧とるし有れば其寺
へ往き暫時忍びて居りし初る遠境の寺院
へまが探索来りてまがびりけれを進退すべし究
まわり此とき西々隆盛も京師より逃れ帰り鹿

児島ふありしが月照と尋ね来り平野二郎の月
照と共に前より此処に居り二杯茶を烹んとし
て勝手へ往きさら後みて西郷言ふ僕の今日師と
訪ひしに参政より師と諭して早く日向の方へ
落さすべしとの内意ありと嘆き月照暫時うん
がへ日州の吾が死るところと思はるる吾を止めより
幕府の爲に戮せらるるを嫌ひ大いよ君方の心
と勞したり天運猶開ることあり事の茲に至る

は是非を願ふを我が首を君の手で刎て殺し
たまわれ同志の者の死に死を思ひ遺すところ
る一夫来介錯を頼むとく西郷ふ膝つき付れ
る西郷の大息一哉何の辛苦画餅とあり憚るま
場ふ迫りしに天あり命あり先師死を僕もま
死んと竊よその針策を納しし時よ平野二
郎土瓶茶碗を持出て茶をすすめければ三人とも
是を喫して後月照の僕の十助を連れ西郷ふ

よび平野も共小船も乗り日向へ往んと鹿兒島の
岸より漕出たり時小十月十五日の夜みく風和
らうよ波平るるれを照り勝る月よ水の面の宛然
鏡の如く冷光船と影ひて亦と得ぐこき良宵
まり茲よ於て月照の為よ齋したる酒食とひ
らき一盃を傾け西郷言ふ今宵の慷慨激談と
禁ドたる風流愉快のことを舒べ相俱よるるさ
むべーとて詩と詠ト歌とよを樂とすこふる酣

るるとき船の稍磯の離宮の畔と下れり時小月照
船端ふ立ちいで月の半天よ廻ると仰ぎ黒斗執出
し曇りるる心こころの月つきもさらま瀉たぎたさの波なみるる於て
入りぬる一大君のたもみ何なり惜しりらんさらまの
瀬戸ふ身みの沈しづむとも十二首ふしのちと懐中紙ふとこんがみの端はし
ふ書うきとも忽とちまち海うみよ飛と入りて底そこの藻屑もくずと消きえ
とりけり此折このをり西郷さいこうも共ともよ海うみへ飛とび入り一いの月つき
照せうと齋ひとく入水いすいして死しりとりと言いふことと世よふ



清水寺の月
 照日向の沖
 身を投ず

流布させんと謀畧るり物るるべし月照が十

七田忌又當るの日西郷の詩あり

相約投淵無後先 豈圖波上再生縁

回頭十有餘年夢 空隔幽明哭墓前

實は是安政五年十月十五日の事ありて勤王無二の

大忠臣と龍宮城の人と為せし大息哭泣するよ

堪へし西郷吉之助も此とき月照師と共に入水

の体を示し薩海の波に没し死したりと世間へ流

布ふのさせとれと実じつの尚なほ有志ゆうしと募もりて薩長さつちやうの間まと
奔ほん走そうるる居おるると思おもひるる小生せうせい事ことも苦く中ちゆうの苦くと忍しのび
猶なほ潛せん伏ぷくるる一いつつりつが先頭せんとうより攝播せつぱの間まふふいいく
尊攘そんじやうの説せつと主張しゆちゆう一いつつ既すでふふ二百餘よふひ名なの勇士ゆうしを得えたり
然しかるるよ去さるる四月中しがつちゆう島津しまづ和泉わいづ君きみ自國じこくを發はつしたまひ
江戸えどふ赴おもむくるとして播州はくしゆう姫路ひめぢふ着ちやくせしと聞きく故ゆゑ
小生せうせい巨魁きょくわいととり二百餘よふひ人ひとと共ともに島津しまづ侯こうの旅館りようかんふ
群ぐん參さんし書しよと和泉わいづ侯こうよりよりどして去さるる嘉永かえい六年ろくねん外がひ
春雨かみゆ三さん十じゆ二に十じゆ二に

異いら渡来とらふせしより以來いらい幕吏まくしその政事せいじを謬あやるるふ
乘いト夷人いじんををいふ増長さうちやう一いつつ大坂おほさか兵庫ひんぐ堺さかいの開港くわいこうも
當月たうげつの條約じやうやくなりなり倘なほも三津さんしんと開ひらきるを夷人いじんら商館しやうかん
ととるるづけ城郭じやうかくの如ごとき建けん築ちやくととるる一いつつ港内かうないの軍艦ぐんかんを
敷つきぎ海陸かいりくの要路えうろを塞ふさぐる一いつつ鳳闕ほうかくの危あやふふききと風前ふうぜんの
燈火とうびの如ごとくくららんん因よつて西國さいこくの有志ゆうしらと相計あひしりり勤きん
王きゆうの志しを遂とげげと思おもふ君侯きんこう臣しんららが微意ひいをを憫あはれれそ
此この儀ぎををりりくく宜よろしく奏そうし給たまはれと願ねがひ出いされど

も埒らちありず折せりから僕わが古主こしゆ筑前ちくぜんの大守おほし黒田くろゑ彦ひこ
江戶えどへ參勤さんきんあらんとて播州ばんしゅう大倉おほくらまで來駕らいがせら
れしうさ直すちよお推參すおさんして此度このたびの一いつ拳こぶしを忠告ちゆうこくせし
ところあまた山やま計けいらんや捕縛とらふの繩なひめふ掛からんとんト讀よみ
つ四邊あつり見みまらして思おもはす溜息なげいきはくまり

春雨文庫三編上の終

010190508248

